



日本「アジア英語」研究会 ニューズレター

No.1 (Oct. 1997)

日本「アジア英語」研究会発足にあたって

委員長 本名信行 (青山学院大学)

英語はアジアの言語である。アジアにおける英語の国際的普及は、アメリカ人やイギリス人などのネイティブ・スピーカーの英語がそのままのかたちでこの地域に広まったということではなく、ノンネイティブ・スピーカーがそれぞれの歴史的、社会的、文化的必然性に合わせて、いろいろな方法で英語を使うようになっていく姿を指している。このように、英語がネイティブ・スピーカーの枠を越えて、ノンネイティブ・スピーカーを含む多くの人々の異文化コミュニケーションの手段になったということは、英語を英米文化から切り離して運用することが可能になったことを示している。これは英語に新しい国際的な役割を与えることになる。

アジアの人々は一般に英米文化を学習するために、そしてネイティブ・スピーカーと同じように話すために英語を勉強しているわけではない。むしろ、自分が属している民族と文化を意識し、自分を国際的な場面で表現する道具として、英語を使おうとしているのである。この動機傾向は、最近の中国やベトナムでの英語熱についても顕著にあてはまる。

アジアで旧英米植民地が独立国家として発展するなかで、現地の人々は英語をどう取り扱うかについて頭を悩ませた。彼らは最初は英語を使うと旧宗主国の文化を引き継ぐことになり、独自の国民性を育成できないのではないかと危惧していた。しかし、自国の社会的文化的状況に合った独自の英語パターンを創造することによって、この問題を解決できることに気づいた。

このようにして、インド人はインド人らしい「インド英語」、シンガポール人はシンガポール人らしい「シンガポール英語」、フィリピン人はフィリピン人らしい「フィリピン英語」を、それぞれ話すようになる。各変種には、もちろん、発音、語彙、文法にクセがある。

それではお互いに通じないではないかという疑問が生じる。しかし、よくみると、これらの変種には差異よりも共通項のほうがずっと多いことがわかる。英語の多様性を肯定的に評価すれば、相互理解を可能にする媒体を発達させることができるであろう。日本人もそのような努力を積極的にすべきであろう。

アジアの人々は英語をかなり自由な気持ちで使っている。英語を国際言語と考えるならば、英語と英米文化は必ずしも同一視できなくなる。英語は英米文化を模倣する手段ではなく、世界

の人々と交流し、相手の意見を聞き、自分の考えを表現することとなる。日本人なら日本文化を背景として英語を使うのが当たり前なのである。しかし、日本人は日本語を話すときと英語を話すときとは、態度が違うものと思いがちである。このような見方は英語を英米のことばとするところからきている。それは現在の英語の国際的機能からみて、適切ではない。

日本人はこれからアジアの人々と英語コミュニケーションの機会が増えるはずである。自分の日本人英語を信頼し、彼らの多様な英語を正當に評価する論理が求められる。それはアジアの人々との相互理解を促進する共通の媒体を創造する努力なのである。英語を自由に使いこなすなかで、英語の新しい規範意識が誕生すると思われる。

以上のことを考えると、本会の意義は明瞭である。本会ではさまざまな研究活動を通して、次のテーマを本格的に追求したい。

1. アジアにおける英語の普及に関する社会統計
2. アジア諸国の英語行政、教育政策
3. アジア英語の諸変種にみられる音韻、語彙、文法、表現、レトリックの特徴
4. アジア英語の諸変種の相互理解のための比較対照パラメーター
5. アジアにおける英語の国際化と多様化の観点からみた「ニホン英語」の正当性に関するミクロ的、マクロ的論理の構築
6. アジアの文芸、芸術、メディアにおける英語の役割
7. 英語とアジア諸言語の接触現象と動向

これらは上にのべてきた問題領域を明示したものである。私たちは常に有意義な問題意識をもち、本会を相互啓発の場として発展させたい。

研究会から学会へ

本会を研究会から学会にする計画が進行中です。去る7月6日の運営委員会で、「学会」に名称変更することが既に了承されました。については、来年1月に開催予定の第2回全国大会の総会で、その旨を会則その他の必要事項と共に提案し、しっかりとした組織作りをしていく所存です。

(運営委員会)

《第1回全国大会 青山学院大で開催》

7月6日(日)、青山学院大学(渋谷キャンパス)総合研究所ビル第19会議室において、第1回全国大会が開催されました。大会は下記のプログラムにそっておこなわれ、140名余りの参加をえて、盛会のうちに終了しました。大会は、鈴木孝夫氏の特別講演に始まりましたが、ご講演の内容については、大原始子氏が、我々会員に対する示唆という観点をふまえてまとめてくださいました。

また、日刊英字新聞 *The Daily Yomiuri*、および月刊「言語」(大修館)10月号にも大変詳しく取り上げられました。この度、両社のご好意によりここに全文を転載させて頂けることになりましたので、今号ではこの二つの記事をとおして大会の全体像を紹介させていただきます。

大会プログラム

- 9:30 受付
大会総合司会
午前：高本裕迅(白百合女子大学)
午後：矢野安剛(早稲田大学)
- 10:00 開会の辞：本名信行(青山学院大学)
- 10:30-12:00 特別講演「和臭を恐れるな！—
日本英語のすすめ」
鈴木孝夫(慶応義塾大学名誉教授)
- 1:00-3:00 パネルディスカッション 1
アジアの国際言語としての英語—言語
政策の観点から
司会：森住衛(大阪大学)
藤田剛正(長崎大学)
源邦彦(青山学院大学院生)
末延岑生(神戸商科大学)
- 3:30-5:30 パネルディスカッション 2
アジア英語諸変種の研究課題—フイ
ールドからの報告
司会：本名信行(青山学院大学)
インド：榎木蘭鉄也(神戸市立高
等専門学校)
フィリピン：小張順弘(サンカル
ロス大学院生)
シンガポール：大原始子(大阪成
蹊女子短期大学)
- 閉会の辞：エリック・ベレント
(清泉女子大学)
- 6:00 懇親会
於アイビーホール(青学会館)

鈴木孝夫氏特別講演Review

鈴木「哲学」に触れて

大原始子

(大阪成蹊女子短期大学)

言語に関わる人は、ときにそれぞれの「哲学」を垣間見せる。日本「アジア英語」研究会を発起するにあたって、鈴木氏の講演はまさに我々の断片的な「哲学」を包括したものだと言える。示唆的な言葉の幾つかを思い出してみたい。

最初に、導入として、語学の伝統を同化主義(自己植民地化)の度合いによって説明した。横軸に語学が目的とする項目を三つ、征服・制御、自己顕示・宣伝、自己啓発・教養主義の順に取り、縦軸に三国家を、アメリカ、中国、日本の順に取った図を用い、呼応する箇所から、その国家における語学の大方向の有様を示した。つまり、アメリカは征服のために言語を考えてきたのに対し、中国はイデオロギーを顕示する手段として言語を捉えてきたとし、日本では言語を学ぶということはいくまでも教養としての色合いが濃かったというわけである。日本(人)の場合、漢文学の伝統以来、対象言語との地理的距離という大前提が常にある反面、対象言語に自らを合わせていく傾向があると指摘した。

次に、日本人にとっての英語の機能への言及が、トルコ語、フランス語またはドイツ語と比較しながら行われた。トルコ語は他への応用があまりない点から、研究目的のみであると、フランス語またはドイツ語はかつて科学技術の中心で使用された言語であることから、目的及び手段の言語であるとした。そして、英語は目的、手段だけでなく、母語話者と非母語話者間で、ある種リング・フランカの色合いを有することを踏まえて、国際交流の機能を持つとした。問題は我々がその英語の機能をいかに知るかということにある。

講演で、鈴木氏は流れるような語り口の中で、豊富な言語経験に基づいた素材を我々に提供した。その素材をどう料理していくかが、日本「アジア英語」研究会のメンバー個々に与えられた課題でもある。それは、日本人が英語の器に自身のアイデンティティを盛るのであるという鈴木氏の言葉が示してくれるであろう。このことは、言語に関わる者は、まず柔軟な思考を持つべしとする氏の「哲学」の表出ではないだろうか。

English in all its varieties

The Daily Yomiuri (Monday, August 4, 1997)

by Chiyono Sugiyama (Daily Yomiuri Staff Writer)

Japanese have always turned to Britain or the United States when studying English, trying hard to acquire "correct" pronunciation and grammar from the language's native speakers. Such flattery as "Your English is just as good as a native speaker's" has long been the ultimate compliment for many Japanese students.

But it is time for us to start thinking of English as a tool to facilitate communication between Asians, and accept different varieties of English, according to Nobuyuki Honna, professor at Aoyama Gakuin University. Honna said English is now widespread in countries where English is not the mother tongue, especially in Asia where the language is heavily employed as a means of communication between people of diverse cultures and speaking different languages.

"According to a recent survey, 350 million people speak English in Asia," he said. "It is now an international language as well as a domestic language in many countries in the region. This indicates that English is becoming independent as a language from the cultures of its origins— Britain and the United States— and is taking on a new international role."

On July 6, the Japanese Association for Asian English[es], a group recently formed by Honna, held its first meeting in Tokyo, attended by about 130 people.

Honna told the participants that the association will study the development of English in Asia and the use to which the language is put. The aim of this study is to try and improve English education in Japan— where English is not necessary for daily life— by freeing students from the shackles of a life-long, self-imposed obsession to acquire "correct" English, he said.

Unlike people in other Asian countries, where the mother tongue and English are used in the same manner as a communication tool, Japanese often appear to change their attitude and way of expression when they speak English.

"This originates with the idea that English is not their own language, but an Anglo-American language," Honna said.

"But this is inappropriate in the light of the language's international function."

Takao Suzuki, professor emeritus at Keio University, encourages Japanese not to be afraid of incorporating "Japaneseness" into their English.

"Foreign language study in Japan has been categorized as auto-assimilation. For centuries, Japanese have made every effort to assimilate themselves into whichever culture was at the 'center of the world' at that time," he said.

This is all right in terms of studying a foreign language and understanding a foreign culture, Suzuki said. At present, however, English is utilized as an international language by both native and nonnative speakers, so Japanese should consider it a practical language and allow their individuality to flow through it, he said.

At a panel discussion titled "English as a Language for International Communication in Asia," Takemasa Fujita, professor at Nagasaki University, said English is considered the most important international language by Asian countries. However, language education policies, which are affected by cultural, historical and political circumstances, differ from one country to another, he said.

Kunihiko Minamoto, a graduate student at Aoyama Gakuin University, pointed out that as Asians do not link English with any particular country, it is therefore uniquely suited to becoming an international communication tool.

Mineo Suenobu, professor at Kobe University of Commerce, said that according to a study he carried out in 1987, 79.2 percent of the English spoken by Japanese college students was intelligible to native speakers despite grammatical mistakes. He suggested that Japanese English should strive to become, as he put it, "kindly English" that is easily understood by everybody.

But how linguistically tolerant are Japanese? Accepting and understanding varieties of English is indispensable for Japanese. During the discussion, a Tokyo high school teacher said he showed a video to his students of Kenzaburo Oe delivering his acceptance speech in Stockholm after he was awarded the Nobel Prize in Literature.

"I thought it would be a good idea to show an example of Japanese English being used intelligibly in front of an international audience," the teacher said. "Overcoming linguistic biases and encouraging linguistic tolerance form the basis of language education." But the teacher recalled being nonplussed when his students burst into laughter upon hearing Oe's English.

Suenobu suggested that the students were actually laughing at themselves, and at conventional English education. Teachers should explain that this kind of laughter can hurt others, he said.

Honna said he used the same approach in his university class. As a kind of awareness training, he teaches his students about the roles of English in the modern era, explaining that the language is an international one spoken in many accents.

日本「アジア英語」研究会 第1回全国大会報告

久保田信一
(明海大学)

日本「アジア英語」研究会(委員長本名信行氏)の第1回全国大会が、「アジアにおける英語の役割」というテーマのもとに、1997年7月6日青山学院大学で開催された。梅雨のあいまの強い陽射しのなか、全国から多数の参加者が集まり、アジアで急速な普及をしている英語について、活発に議論が交わされた。

まず、総合司会の高本裕迅氏の挨拶ではじまり、本名委員長が設立の趣旨を説明した。それによると、同研究会はアジア地域での英語の国際化と多様化について考え、相互啓発の場として発展して行くことを目的とする。追及する問題領域は、英語の普及に関する社会統計、英語行政、教育政策、音韻・文法・レトリックなどの特徴、変種の相互理解のための比較対照パラメーター、アジアの文芸・芸術・メディアにおける英語の役割、英語とアジアの諸言語の接触現象と動向、「日本英語」の正当性に関する理論の構築など多岐にわたる。引きつづいて、鈴木孝夫氏の「和臭を恐れるな！—日本英語のすすめ」と題する特別講演に移り、日本人の発信する英語には、発想や表現に「和臭」があることが好ましいという主張がなされ、さらに英語教育や日本語の国際語化についてユニークな論が展開された。

午後にはパネルディスカッション1「アジアの国際語としての英語—言語政策の観点から」が、まず行われた。司会の森住衛氏からは、この広い「アジア」において、ある国の言語政策が直ちにその国の特殊性になりえるのか、あるいは普遍性をもちえるのかといった検証の必要性が提起された。藤田剛正氏はアセアン諸国の言語政策と英語について述べ、ベトナムにおけるロシア語から英語への外国語教育の移行にも触

れた。源邦彦氏はシンガポール在の東南アジア教育相機構・地域言語センター(SEAMEO RELC)の歴史的な意義、とくにその1968年の発足時に、米国国際開発局(USAID)が英語政策においてどう関わっていたかについて言及した。末延岑生氏は英米語にこだわり過ぎる日本の英語教育についての疑問を述べ、「Kindly English(人に優しい英語)」がニホン英語の基本となるのではないかと提言した。

次に、本名氏の司会でパネルディスカッション2「アジア英語諸変種の研究課題—フィールドからの報告」に移り、英語が国内的にも極めて重要な役割を果たしているインド、フィリピン、シンガポール三か国からの報告が行われた。英語との古い関わりをもつインドについては、榎木蘭鉄也氏からフィールド体験をまじえた言語事情と言語政策の説明があり、フィリピンの大学院で英語教授法の研究を行っている小張順弘氏はフィリピン英語の多様性、フィリピン語と英語との国家言語政策上の関係を考察した。シンガポールでフィールドワークを行っている大原始子氏は、シンガポール英語のダイグロシアへの移行過程モデルを示唆し、教育制度と言語政策がほぼ一体化している特殊事情について説明した。閉会に当たってエリック・ベレント氏からは、アジアの言語との接触から生まれている斬新なアジア英語諸変種の積極的な研究も必要であり、同時に英語が変種として普及していく過程での誤解をどう修復していくかという問題もあるとの指摘があった。

第1回であるにもかかわらず出席者は予想以上に多く、最近の「アジア英語」への関心の高さが感じられた。出席者の関心を筆者なりに分析してみると、次の三つに帰着するようである。①英語がアジアの言語になっていることを再認識し、その実態を把握したい。②英語を英米文化とは一応切り離して運用することの可能性をさぐる。③日本の英語教育はどうあるべきかを、アジアの英語という視点から見直したい。その他、民族のアイデンティティ、アジア各国の言語、社会、政治経済との関連から見たアジア英語へのアプローチにも、参加者の強い興味が示された。

ひきつづき行われた懇親会には、国際英語の世界的な権威であるラリー・スミス氏も参加、日本「アジア英語」研究会の発足を祝福した。なお、次回の第2回全国大会は来年1月31日、神戸市で開催の予定と発表された。

(「言語」(大修館)10月号より転載)

近刊書評

シンガポールの言葉と社会—
多言語社会における言語政策

大原始子著

(三元社刊, 198pp., ¥2,369)

日本でアジア英語に関心をもつものあいだで、シンガポール研究がさかんになっている。シンガポールでは英語の国際的な普及と多様化に関連した諸現象が鮮明に観測できるからである。なにしろ、国民のどれもが母語としない英語を、国をあげてワーキング・ランゲージとしているのである。そこには、英語とナショナル・アイデンティティとの関係を基礎として、英語の機能と役割がいかに構造と形式を決定するかが、かいま見られる。

著者はシンガポールに魅せられ、フィールドワークを続けてきた。本書はその「言語社会学的」レポートの一部である。英語のみではなく、中国語やマレー語の状況にも言及があり、諸民族の人々の息づかいが感じられる。そういった記述のなかで、シンガポール英語を生活のことばととらえる学問的方法論がいろいろと試みられている。著者の行ったアンケート調査はシンガポールにおける英語使用の動向を予測するのに示唆的である。

(本名信行評: 『言語』1997年7月号所収)

インターネット上に ホームページを開設

本研究会のホームページを2カ所に作りました。青山学院の方のURLは、
<http://www.siweb.aoyama.ac.jp/~nh-home/index.html>です。

また、(株)アルク(出版社)のご協力をえて、アルクのネットワークにもホームページを作っていただきました。

<http://www.alk.co.jp/jafae/>

研究会ロゴマークのデザイン完成

本号タイトルページ左隅のロゴマークは、State of Hawaii, Department of Education の Art Curriculum Coordinator, Mrs. Wendie Liu にデザインしていただきました。

三角は stability を表し、中の丸は日の丸(オリジナルは赤色)を表します。

海外研究紹介 (論文)

Establishing, Promoting
and Using English
as an
International Language
in Asia

Edwin Goh

Director, RELC

(Regional Language Centre)

Singapore

We need to go back to our history books to discover how English came to Asia. It came with the opening of the East by English colonialists, imperialists and conquerors, the same people who planted the American colonies which became the United States today and who conquered India and ruled it for three hundred years. Today in Asia it is perceived to be the language that opens doors of opportunity for the young who want better paid jobs working with international corporations. For governments it is the language of regional groupings such as ASEAN or APEC where their officials need to communicate in English. In short, English promotes itself as the language of the powerful.

Our approach to English will have to take into consideration several issues. Firstly, English is not like any other foreign language. There are many Englishes and "many gods" that we have to satisfy (Kachru, 1991). There are two options: a monolingual option that adopts American or British English as standards or a multilingual option that adopts International English as the standard. This latter option accepts every variety of English as having equal rights of existence. Secondly, every local variety of English has the capacity to be "close enough in intelligibility to the international standard which is represented by the American or British acrolect" (John Honey).

External standards set for Japanese students do not help develop the Japanese acrolect for they are not sociolinguistically relevant. Thirdly, the teaching of English should help narrow the sociocultural distance between English and the learners' own language. Japanese students, for example, should learn English to help the world understand Japan and

Japanese culture as much as they learn the cultures of the English speaking peoples through English. Finally, and certainly not the least, we have to respond to the dominance of English in the contemporary world both attitudinally and culturally. It is the language of "the most powerful concentrations of economic power the world has ever known" (Doug Holly), but it is free for all to possess (Widdowson). We have to use it to express ourselves.

We can conclude from all this that it is best to approach English as an international language taking into consideration its multicultural and multilingual environments and adjusting to its many varieties meaningfully and without prejudice.

(This is a summary of a paper read at the 2nd Global Classroom Conference at Aoyama Gakuin University, Tokyo, Japan on July 26, 1997.)

他学会からのお知らせ

Fourth Int'l Conference on World Englishes

12月19日から21日までシンガポールのヨークホテルに於いて World Englishes Conference が行われます。昨年の年次大会はハワイ大学で行われました。今回、当研究会委員長の本名信行氏が、Focus speakers のひとりになっております。今年は参加申し込みが多いとのことですが、まだ受け付けています。参加ご希望の方は、なるべく早く以下の事務局に直接ご連絡ください。

Dr. Chng Huang Hoon
Secretary, IAWE Organising Committee
Fax: 65-773-2981(Singapore)
Email: elliawe@nus.sg or
ellchh@leonis.nus.sg

TESOL Journal 投稿募集

The Autumn special issue of TESOL Journal will focus on understanding the role of language rights in the education of students within multilingual settings.

Contributions are welcome (articles, tips, reviews and perspectives). The deadline for submission is January 2, 1999.

For further information, please contact
Ms. Toshiko Sugino (杉野俊子)
(The National Defense Academy: 防衛大)
Home Tel/fax: (045) 893-9345
E-mail: RXE21345@niftyserve.or.jp

事務局から

* 入会について

入会は随時受け付けておりますので、大学院生、企業の方など広くお誘いください。詳しくは、事務局にご連絡ください。

* 本研究会の運営委員紹介

本名信行 (委員長, 青山学院大学)
秋山高二 (山梨大学)
榎木蘭鉄也 (大会, 神戸市立高等専門学校)
大島真 (実践女子大学)
大原始子 (大会, 大阪成蹊女子短期大学)
神田和幸 (中京大学)
高本裕迅 (編集, 白百合女子大学)
末延岑生 (大会, 神戸商科大学)
竹下裕子 (会計, 東洋英和女学院大学)
田嶋ティナ宏子 (事務局, 青山学院大学)
橋内武 (大会, 桃山学院大学)
エリック・ベレント (清泉女子大学)
三好重仁 (会則, 東京電機大学)
森住衛 (大会, 大阪大学)
矢野安剛 (会計監査, 早稲田大学)

* 第2回大会の研究発表を募集いたします。

アジア英語に関する研究をしている大学院生、企業の方などにも発表をしていただきたいと思っております。日時等は、以下の予告をご参照ください。

第2回全国大会 予告と研究発表募集

大会テーマ:

アジアにおける英語の普及と変容

第2回全国大会は、1998年1月31日(土)に神戸商科大学にて行います。特別講演、シンポジウム、研究発表を予定しています。

研究発表希望の方は、10月末日までに要旨(日英どちらか)をA4 1枚にまとめて事務局までお送り下さい。

1997年10月1日発行

編集・発行 日本「アジア英語」研究会

代表者 本名信行

編集長 高本裕迅

発行所 青山学院大学国際政治経済学部

(事務局) 本名信行研究室内

〒150 東京都渋谷区渋谷

4-4-25

TEL 03-3409-8111(代)

FAX 03-5485-0782

E-MAIL honna@sipeb.aoyama.ac.jp